



あねてい♡
お姉ちゃん先生は弟専用

上原りょう
illustration ©Yuyi

美少女文庫
FRANCE & SHOIN



転校先は…… お姉ちゃんの学園よ！

竜之介は昔から、ある種の空気の流を読むことができた。自分の身にこれからなにが起きるのか、なにが待ち受けているのか、その起きていること、待ち受けているものは自分にとっていいことか、それとも悪いことか。

それは別に、格闘家のように日々の鍛錬によって開眼され、育まれた特殊能力というわけではない。竜之介は十六年という日々的大半を施設で過ごしてきた。空気に對して敏感なのは、もしかしたら施設内で子供たちの頻繁な出入りを見つづけ、肌で感じることによって知らずしらずのうちに芽生えたものかもしれない。

明日、里親にもらわれる子。急遽^{きゆうきよ}里親から断りを入れられてしまった子。施設に来て間もない子。施設の子供たちのお姉さん、お兄さん代わりになる子。

施設のなかで過ごす悲喜こもごもを、竜之介はテレビの画面越しではなく、リアル

なものとしてすぐ傍で感じつづけた。

だから今、走り抜けていく車のなか。

自分の身が、予想もできないような強烈な磁力で引き寄せられていることがなんとなくわかった。窓越しの、次々に流れていく景色を見る。さっきから同じような会社の看板が目立つ。

東光院銀行、東光院証券、東光院組、東光院マネジメント……。

東光院。

その名前を聞くと、竜之介は決まって無表情になる自分を自覚した。

少年がまだ五歳の時、里親として名乗りでたのが世界屈指の巨大資本グループ、東光院財閥の当主、東光院瀬一郎とうこういんせ いちろうだった。彼には子供がいたが、長男は若くして病に倒れ、次男は放蕩者ほうとうもので散々財産を使いまくった挙げ句に姿を消した。

封建的な家風の残る戦前に発足した企業なだけに、東光院の一族がトップになるべきだと考えていた瀬一郎は血眼になって純血の東光院モノを探し、竜之介を見つけた。

実は竜之介は、瀬一郎の次男、隆瀬たかせの子供だった。だが隆瀬と竜之介の母は蒸発。結果、竜之介は施設に入れられていた。

それが五歳の時、瀬一郎によってもらわれ、未来の東光院財閥の後継者として指名

を受けた。竜之介もそれに応えようと懸命になった。しかし瀬一郎の過大な期待に比べ、竜之介はあまりに凡才すぎた。そして竜之介は次期後継者という地位から、再び施設に戻されることになった。

自分の血を引き継ぐ者なら、優秀で当たり前というなんの根拠もない自信を持っていた瀬一郎から、竜之介は放擲ほうてきされたのだ。

それからというもの、少年は荒れた。

小学校の時にも血氣盛んではあったものの、まだその時は体力が充分についてこなかった。しかし中学に入學する頃になると、体もより大人っぽくなり、筋骨の作りは小学校の頃の比でなくなる。身長も伸びて、竜之介は常に針を逆立てているハリネズミのようだった。

それでも無駄な喧嘩はしない。自分や友人が理由もなく因縁をつけられたりすれば、相手をぼこぼこにするぐらいだ。時には警察沙汰に発展したりすることは珍しくはなかった。にもかかわらず施設を追いだされたりしなかったのは、まだ竜之介の喧嘩に大義名分があったからとも言える。

それから中学の二年あたりで、再び竜之介が東光院の家に入るようになるうとは本人にとって思いもよらなかった。

しかしそれは瀬一郎の意思ではなく、それまでずっと海外暮らしをしていた瀬一郎

の長女夫婦（つまり、竜之介の叔母だ）が引き取ったのだ。そこで少年は普通の子供が当然慈しまれるようにして育てられ、瀬一郎の元で過ごした日々がなにかの間違ひのようにのびのびと過ごすことができた。また、信頼するに足る優しい従姉にも再会することができた。実際、今の高校に通えるようになったのも、つきつきりで勉強を見てくれた心優しい彼女のおかげだ。

だがその従姉であり、義姉でもある女性が、今日は、竜之介のことを迎えに来た時からずっと、仏頂面を崩さず、瞳には知性の輝きと一緒に誰をも黙らせる力強い眼光をひらめかせつづけているのだ。義姉は美しい眉弓を強張らせ、才媛として鳴る表情をゆるませることがない。背中を流れる美しい髪は色素が薄いせい、か、陽の当たり具合によって紅葉のようにあでやかに染まっているように見え、甘酸っぱさを香らせたやがて車は、お寺の境内へとすべりこんだ。境内にはたくさんのお寺の喪服姿の大人たちが集まっていた。そして誰しもが、今到着した竜之介たちの車へ注目している。

思わず少年は着崩していた公立高校の制服を整えてしまう。東光院家の圧力が、そうさせていた。

「葬式？」

今になって気づいたが、義姉である綾瀬もまたタイトスカートの喪服姿。身長が百七十四センチと、男性のように高く、すらりとしてスタイルのいい彼女には、その厳

かな衣裳さえ華やかに見えた。そんな美女がしゃんと背筋を伸ばし、威風堂々と歩く様は誰しもが息を呑むことだろう。さすがは、数少ない近親者のなかでも最も瀬一郎に好かれただけのことはある。

「竜之介、こっちに来なさい」

綾瀬の涼やかな声が、少年を招く。今さらながら、義姉の化粧気が少ないことに気づく。彼女の身体からかもしだされる華やかさに目移りし、化粧をばっちり決めていると思えたのは気のせいのようなのだ。

竜之介は自分の体に突き刺さってくる視線にばつの悪さを感じながら義姉のほうへ向かう。少年は、数日前に明るい茶に染めていた髪を、ほとんど毎日のように注意してきた学年主任がわずらわしく、黒に染め直したことを、グッドタイミング！と思うずにはいられなかった。もし、茶髪でこの場に来ていたなら、じろじろという視線だけではとてもじゃないがすまなかったはず。「この一族の恥さらしめ」と公然と擲^や擲^ゆされ、義姉に恥をかかせていたかもしれない。

式場に入ると、竜之介はそこではじめて、ここが誰の葬式の場なのかを知る。

東光院財閥総帥、東光院瀬一郎。

式場内には、さすがは財界の大物、ずらりと参列者のための椅子が用意され、また贈られた供花^{くげ}・花輪も数知れず、どれもが日々の生活で目にする大会社のものばかり。

そしてたくさんの菊に囲まれた遺影には、しかつめらしい瀬一郎の白黒写真。

確かに一族のトップが亡くなれば、当然竜之介も参列する義務はあるだろう。しかし、竜之介が瀬一郎に対し、うら怨みにも似た感情を抱いていることを、綾瀬が知らないわけがない。竜之介にとつて瀬一郎は畏れの対象以外のなものでもない。

瀬一郎の死を伝えはするだろうが、こんな半ば強制的に連れてくるような真似は決してしないはずなのに。

「綾ネエ……」

「さあ、あなたもやりなさい」

綾瀬は焼香を厳おごそかに行なう。

竜之介としては、織田信長張りに焼香を思いっきり遺影にぶっかけ、「ようやくくたばりやがったか、妖怪ジジイ」と罵ってやりたかったが、綾瀬の手前だからその欲求を泣くなく抑え、（何回やるんだつけ？）と思いながら、結局、綾瀬にならって三回やって終えた。

これようやく終わったと安心しながら外に出れば。

綾瀬が腕を組んで待っていた。

組まれた腕に、バストサイズ九十近くはありそうなおっぱいが柔らかくひしゃげている。

